第三章　中国遼[契丹] における犬と人間との関係

一　関心の所在

前章は、唐の滅亡の907年までの期間において、犬をどのようにイメージしていたのかを、あきらかにすることを目的としていた。

その論文で、古代漢民族（少数民族も少し含む）は犬が人間とつぎのような特別な関係をもっていることを示した。つまり、「古代中国では悪霊（鬼）に対する脅威感が強く、それを防いでくれるものとして、犬に期待するところが大きかった。

それを防げる特殊能力を、人間は犬に期待した。犬というものは予知ができたり、正邪を判断できたりという人間にない能力をもっていると信じていることをそれは根拠にしている。そしてなんといっても現実に犬が人間に忠実であることが、犬に大きく期待したことと関連性があるという事実を示した。

さらに具体的には、

1）犬は人間に対して忠実な動物として、日本でも中国でも位置づけられている。

2）犬は生者を守るためだけではなくて、死者をも守護すると考えられていた。

3）犬は魔よけや厄除けとして信じられ、そのために犬を殺したり、ドアにその血を塗ったりするということが行われた。この犬を殺したり、犬の血にマジカルな力があるという発想は、日本ではみられない。

4）犬には予兆能力がある。それはとりわけ悪霊による異変をいちはやく察知する能力のことである。

5）犬には本物と偽物とを区別する能力がある。

6）犬は水とのつよい関連性がある。これは日本にもみられる信仰であるが、中国固有の考え方として、水が地下の世界に通じているので、水脈を経て地下の世界を察知する能力があるというものである。以上のことを前章では示した。

これを受けて、本章は唐の次の時代の北方に位置する非漢王朝、遼朝[契丹](907 年～1125 年)をとりあげる。そして前章である古代の漢族と比較して、この遼朝は人間と犬との関係においてどのような差異をもつのかをあきらかにすることを目的とする。

遼朝は時代としては、中原においては、五代十国 907 年～960 年から、宋朝 960 年～1279 年、金朝 1115 年～1234 年までの時代にあたる。

契丹は遊牧民族なので、遊牧動物の管理のために犬をもっている。それは、「契丹犬」とよばれる有能な犬である。史料や遺物から見ると、遼朝時代において契丹人は特別な習俗「石犬鎮墓」を行っている。それは主人と他の動物を守り、他方、妖怪からの魔よけや厄除け、霊物、神霊を浄化するという宗教的機能と、猟犬、牧羊犬などの実用的機能をもっていると判断される。それを以下で具体的に検討することにしよう。

二　契丹人の宗教と信仰

1契丹人信仰の中心を占めるシャーマニズム

契丹人(族)にとって、仏教は優遇された宗教であった。けれども、北方ユーラシアの他の遊牧狩猟民と同じように、もともとの土俗信仰が力をもっていた。この土俗の信仰はシャーマンを中心にしたものである。中国語で「巫の信仰」といわれているものをここではシャーマンの信仰ということにする。シャーマンの信仰は契丹人の精神面の多くを占めている。たとえば、日常生活で説明できないような現象が生じると、必ずシャーマンの助言を求めることになる。

島田正郎の指摘によると「シャマニズというのは、シャンマン〔シャーマン〕が主

要な役割を演ずる宗教形態であるが、その特色はシャンマンが直接超自然界と交通し、常と異なる精神状態となり、神自身となって、神語を語り、託宣を行う点にあるといえる。もちろんそれ自体異常なものには違いないが、それが宗教的民俗となり得たのは、原始人は超自然的な異常な出来事と己の将来とを結合して考えるに急なためであると考えられる。シャンマンの機能には、呪術的機能・司祭的機能および呪医的機能の三つがあり、その分化は完全でない。原始人自身は、常に超人間的な霊の存在を信じ、宇宙の森羅万象をすべて神の創造と考えて、自然界・人間界のあらゆる出来事も、すべて神の摂理と信ずる敬虔な人々であったから、すべての行動に先立って神意を知ろうとする。したがって神霊と人との媒介者としての機能を果し得るシャンマンが、人々の尊敬をあつめたろうと推測できる」（島田正郎、2014、p.92）という状態であった。

梁娜の論文「浅談契丹之犬」では、契丹が行なっていた「陵前立犬の墓儀」の習慣はシャーマンの祭祀から徐々に進化してきたと指摘した上でつぎのようにいう。その要旨を紹介すると以下のような指摘である。

すなわち、シャーマンは神と人間との媒介とみなされていて、シャーマニズムは固有の思考法則と神霊観を具えている。たとえばシャーマニズムにおいては動物に対してそれを神霊として崇める。それにしたがい、契丹人の間では、人間は死後の世界で生活を続けるという考え方から、犬は「辟邪趨吉」（邪を避け、吉を生み出す）の機能があって、それゆえ、契丹人は死者を犬と一緒に埋葬すると、生前のように犬に主人を守ってもらえると考えるのだ（梁娜、2010、pp.99-100）という。

この考え方は前章（そのオリジナルは潘、2017）でみた「中国古代」（漢民族）の人たちと同じである。ただ、梁娜はこのような考え方は、犬が常に牧人を見守るとともに、家畜の群れを保護するという事実から生じるのだと解釈している。

2 仏教の影響

仏教は漢民族の文化から影響をうけて契丹に入った。そしてシャーマニズムに比肩するほどの宗教的影響があると思われるので、ここで少しその状況を述べておく必要がある。

吉田一彦の指摘によると「アジア東部における仏教文化の展開を考察する上で、近年あらためて注目されているのが契丹（遼）の仏教である。契丹では、多くの寺院・仏塔が建立され、歴代の皇帝たちが仏教を信奉し、契丹大蔵経が作成されるなど、華やかな仏教文化が栄えた」（吉田一彦、2013、p.52）。

また山根弓果はつぎのように言う。「太宗は遼朝の最高儀礼である祭天地の場所、木葉山に、白衣観音像を安置する廟を設け、木葉山神に拝謁する前にその菩薩堂に詣でる儀を増やしている。契丹古来の習俗信仰と仏教信仰とを同格に扱っているといえるだろう」（山根弓果、2011、p.51）と仏教信仰と契丹古来の習俗信仰（シャーマニズム）とが同格であると指摘している。

さらにいう。「儀礼が漢人の儀礼に即して整備されたことからも窺えるように、漢人の制度が参考にされた。もともと漢人が信仰する仏教に対しても、遼皇帝自らが崇敬する態度を示して厚い寄進を行うことによって、皇帝の絶対的権力の顕示を狙ったものである可能性もある」（山根弓果、2011、p.51）。

このように契丹族も漢民族の思想の影響を受けて、国の制度や信仰を変形させてきたのは事実である。それにもかかわらず、契丹本来の信仰は根強く機能していた。そのことを山根は今井秀周の論考を引用しながら指摘している。すなわち、「今井氏は、遼史本紀にみえる祭天十三条・祭天地五十五条の記事を提示され、各記事の内容を祭天は皇帝が狩猟を行ったさい、その獲物を天に捧げたというのが多く、かたや祭天地は青牛白馬などの犠牲が供えられたことから、祭天は簡易な儀式で祭天地は格式ばった祭天儀式であったと推察

し、農耕政策の推進と祭天地を関連付けて考察されているが、筆者はその年月日と事由に着目して『遼史』からその記述を抜き出し、さらに遼代の祭祀を時系列的に抽出した」（山根弓果、2011、p.52）。

このように仏教と契丹本来の信仰とは相互に拮抗してきた面は否定できないものの、仏教の影響は無視できない程度になってきた。その事実を島田は以下のように指摘している。

すなわち「この国〔契丹〕の仏教は、北方仏教の系統に属し、特に真言宗と陀羅尼信仰とが支配的であった。太祖の世代には、中国から仏僧を招き、龍化州に開教寺や大広寺を、また上京に天龍寺などの寺院を建立し、太宗や世宗の世代には、多くの中国僧が主として上京などで盛んに布教活動をし、やがて聖・興・道の三代になると、仏教の最盛期を招来するまでになった。寺院や仏塔が五京はじめ国内いたるところに建立され、仏典の刊行も行われ、多くの名僧知識が輩出し、日本蔵経にも深い影響をもつ、いわゆる契丹大蔵経の雕印や、房山雲居寺の石刻大蔵経の続刻も進められた。それにつれて民間の仏教熱も高まりはしたが、もともとシャマニズムに陶酔したかれらは、千人邑などの講をつくって仏事に従ったり、寺院の維持をはかったりし、四月八日の釈尊誕生会には、官民僧尼をあげて楽しく一日を過したりしたから、寺院は信仰の中心となっただけではなく、それよりもむしろ一般庶民の交歓の地、遊楽の場所として利用された。それによって、かれらは容易に法悦の境地にひたることができるようにまでなっていたのである。（中略）しかし、道宗が晩年仏教を狂信するあまり、やたらにこれにちなんだ行事を設けて国政をかえりみなくなり、国家の保護におもねた僧尼の頽廃を招いたばかりでなく、狂信のあまり生物の屠殺を禁じたり、狩猟に制限を設けるなど、契丹人の生活を脅かすまでに及んで、弊害も著しいものがあるようになった」（島田正郎、2014、pp.96-97）という。このような佛教の弊害もではじめたのである。

三　占星に犬が登場する

天から狗が落ちてきた

『契丹国志』にはつぎのようにいう。すなわち「初，女真入攻前後多見天象，或白気経天，或白虹貫日，或天狗夜墜，或彗掃西南，赤気満空，遼兵輒敗。是夕，有赤若火，先自東起，往来紛紛乱，移時而散。軍中以為凶兆，皆無鬪志」(『契丹国志』、巻十、天祚皇帝上、天慶八年春正月条、p.157)。

この漢文を日本語訳すると、「女真族が攻め込んだころに、天体の現象がたくさんが見られた。白い気が天を通り過ぎ、白い虹が太陽を貫く。また、夜に天狗が落ちてきた。あるいは、彗星が西南に走った。そのとき赤い気が空満ち、遼軍は敗退する。夜になると、火の光のような赤気が生まれ、辺りが大混乱して、しばらくしてから消えた。軍中はそれを凶兆と思い、兵士たちの戦う意欲が萎えた」。

このように、天から大きな音を立てて、隕石が落ちて来ることを犬になぞらえて、天狗と呼んでいる。それは、異変の予兆と見なしたのである。

斉建芝はこのことをつぎのように説明している。「天象的怪異現象対遼代契丹族而言、同様預示着将要発生的事物的凶吉。在諸多天象中、被契丹人視為兆象的主要有気的変化、客星的出現以及流星的墜落等」(斉建芝、2017、p.23)。

これを日本語訳すると、「遼代の契丹族について言えば、天体の怪異現象もまた(他の怪異現象と)同様に、これから起ころうとしている出来事の凶吉を暗示するものであった。契丹人が予兆現象と見なしていたのは天体現象の中で、気の変化、新星や彗星の出現、及び流星の墜落など」。また、斉建芝は上の『契丹国志』の記事をもとに契丹人が流星の墜落を凶兆と見なしていたことを指摘する。

『史記』には、「天狗、状如大奔星，有聲，其下止地，類狗。所墮及，望及之如火光炎炎衝天。其下衝如數頃田處，上兑者則有黄色，千里破軍殺将」（『史記』、卷二十七、天官書、p.1335）とある。これを日本語訳にすると「天狗星の形状は大きな流星のようで音がする。上からとがって 地上にとどまると狗のようである。落下するところを望むと火柱のようで炎炎として天をつく。その下は円形で数頃の田ほほどの広さだ。上は鋭くとがり黄色い。それが現れるとその下の国では千里にわたって、敗軍のことがあり、将が殺されたとする」（『史記』、訳注本、p.195）というように不吉を意味する。

四　動物にかかわる年中行事

1 白犬を埋める

犬そのものの分析に入る前に、契丹の動物に関わる年中行事を島田の研究に依拠しながら先に紹介しておく。

「新年の始め、契丹人はシャマンを招いて、帳幕の周辺をめぐり、鈴を振り箭を放つ所作に家人もこれに和し、のち帳幕に入って炉に塩をくべ地拍鼠を焼いて、邪をはらう行事を行った。朝廷では、師巫十二人にこの行事を行わせ、また、糯米を炊き白羊の髄と混じて団子としたものを、君臣ともに食すこととされていた」（島田正郎、2014、p.130）。

そして、さらに「二月一日を中和節とするのは中国の習いであり、人民に穀物百果の種を与え、順風慈雨と害虫の駆除を祈る行事とされた」。そして3月には「三月三日を上巳とするのは（中略）契丹でも上巳を節日として受けてはいるが、木で兎をつくり、組を分けて乗馬し、これを射る行事が行われた。木兎を射差

てた組が勝者であり、敗れた組は下馬して酒を進め、勝った組は乗馬のままこれを飲んだという。国語解にこの行事を『陶里樺』といい、陶里とは兎の意、樺とは射の意とされる。この行事も避邪の意を寓したものに違いない」(島田正郎、2014、p.130)。

また秋になると、「中秋。八月八日、白犬を帳幕前七歩にその口だけを現して埋め、七日夜すなわち一五日を中秋として、白犬を埋めたところ帳幕を移すという行事が行われたという。国語解では、これを捏褐耐といい、捏褐は『犬』、耐は『首』の意とされる。(中略)重九。九月九日、皇帝は群臣を率いて虎狩を催し、のち高地に帳幕を設け、群とともに兎肝と鹿舌で臠をつくり、宴飲を行い、さらに酒を帳幕の入口に注いで、避邪を行うと伝えられる」(島田正郎、2014、pp.131)。

冬には「冬至。白羊・白馬・白雁の血をとって酒と混ぜ、これを飲して避邪に寓する。(中略)臘辰。十二月八日を臘日とするのも、中国の節日に倣ったものであるが、この日、契丹では皇帝が群臣を率いて巻狩を催し、獲物を供えて天地を祭り、清祓を行ったのち、群臣とともに宴飲するとされていた。」(島田正郎、2014、p.132)と述べている。

2 人間世界の妖魔を慰めるための犬

斉建芝はつぎのように言う。「契丹族先民在遠古時期曾靠采集野果和猟取動物來求得生存，不過我國北方廣大地區由於気候溫差大，使得采集業帶有季節性，這就使得狩猟業成了契丹先民獲取生活的最重要手段。後來，契丹人逐漸學會了放牧牲畜，但狩猟仍然是他們獲取生活資料的重要方式，所以，契丹人自始至終對野生動物都有壹種依賴感。他們把這種依賴感不自覺地

又轉化成了對野生動物的崇拜。(中略)遼代契丹人認為狗也有神性。狗對契丹人來說，是門護帳，放牧，狩猟的重要幫手。每逢“八月八日，國主殺白犬於寢帳前七步，埋其頭，露其嘴。後七日，移寢帳於埋狗頭上。”契丹人這樣做的目的是，或者用犧牲來的慰藉地上的妖魔，或者把犧牲本身的靈魂變為庇護的鬼神」(斉建芝、2017 年、p.16)。

すなわち、この文章は日本語にすると、「契丹族の先祖は遠古時代では、野果〔野菜や果実〕の採集や狩猟などで生きていた。しかしながら、中国の北方地域は気候の温暖差が大きいので、野果の収穫作業には季節性があって収穫できない季節もあった。そのため、狩猟は契丹の先祖にとっては、生活のための最も大切な手段であった。その後、次第に牧畜などもするようになったが、それでも狩猟の重要性は変わらなかった。したがって、契丹人は始終野性動物に一種の依存感をもっていた。この依存感からは無意識のうちに、野生動物を崇拝することになった。(中略)遼代契丹人は犬にも神性があると考えた。契丹人にとって、犬は門番、放牧、狩猟の重要な助手だった。そして八月八日になると，祭祀のために国主は白犬を殺して、寝帳の前七歩の場所に口先だけ地面の上に出るようにして、その頭部を埋める。さらにその1週間後、寝帳を犬の上に移動したが、その目的は犬を犠牲にすることで人間世界の妖魔を慰めるため、あるいは犠牲になった犬が霊魂となって、鬼神から人間を守るためだ」と述べている。

五　実生活の中での犬の位置

1 猟犬・恩犬としての犬

猟犬は契丹人に必要不可欠なものである。猟犬は主人に忠実で、馬鞍の前後につねにいる。草原でも森の中において、猟犬は野獣を追いかけて走り回る。猟犬がいるということは遊牧民族特有なひとつの文化であるといえよう。

蓋山林が「犬岩画・犬・犬祭」の論文で指摘していることだが、中国遼朝の考古学の遺存の中で、岩や崖に刻まれた絵は重要な位置を占めている。岩絵は古代中国の各民族の物質生活を示している。古代社会の経済と文化生活をそこから知ることができる、そのように蓋山林は言っている。

たとえば、岩絵に描かれている犬は、図1にみるように、主人（人間）のすぐ近くにいて、動物たちを管理していることがうよく分かる

図１狩猟
出典；「犬岩画・犬・犬祭」p. 59

トレーニングされた犬は、性格が勇敢、動作が機敏、頭の回転は早い。そのため、古代の遊牧民族は犬を大切にする。犬の特性から見れば、犬は視覚と聴覚と嗅覚が特別に鋭敏で、利口であり、人間からのトレーニングを受け入れやすい。猟犬のこの特性は人との密接な関係を決定づけた。

狩猟の時代、猟師は狩りをして動物を捕らえる。そのためには犬の助けが必要だ。犬は人間から食べ物や居住を保障される。

犬は嗅覚がとても敏感だから、獣類の残した痕跡や匂いから、自分の進む方向を見分けることができる。犬は小型の動物を追うことができる。たとえば野兎など。猟犬は獲物に出会う距離に至るや、たちどころに獲物を視野に入れて、獲物に接近し、獲物を逃がさないようにする。

猟犬はまた「恩犬」でもあると蓋山林が言っている。猟師が道に迷った時には、猟犬は帰り道をリードすることができる。猟師がケガをしたときには、猟犬は主人に忠実に寄り添う。そのため、猟師はよく「猟犬は自分の忠実な助手だ」と言う。

その時代、契丹人は狩猟をするときに、弓矢、刀剣、矛銃、棍棒、チェーンハンマーなどの用具を使用し、それ以外に、また馬鞍、鷹鶻を使用する。すなわち、猟犬は人間にとってとても強い頼りとなり、猟犬は狩りにおける重要な役割を発揮しているといえる。

『遼史』には猟犬の記載が多い。たとえば興宗耶律宗重熙二十三年（1053）九月庚寅には、「猟，遇三虎，縱犬獲之」（『遼史』、巻二〇、興宗本紀三、p.247）という。

この史料の語るところによると、皇帝が自ら参加して大規模の狩りをしている。そのとき三匹の虎を獲猟することができた。三匹の虎は群の犬に囲まれている。三虎を得ることができるのは、猟犬の貢献で、その絵ではその時の格闘シーンの激しさを物語っている。結局、三匹の虎は傷ついて、抵抗する力を失って、

最終的に虎は捕獲される。この場面から猟犬が十分な貢献をしているのが分かる。

夏宇旭の論文ではつぎのような指摘がある。すなわち、契丹人の狩猟についてはファルコン海東青〔鷹の種類〕が注目されている。猟犬は契丹人にとって狩猟生活に欠かせないツールである。実は契丹犬は大きくない。しかし、瞬発力が強くて、動作が機敏、速度が目覚ましくて、すごく獰猛だ。普段は居住地で主人を衛守する役割をし、狩猟時は主人と一緒に出かける。そして獣を追いかける。そういうこともあって、契丹人は猟犬の品種の選択と馴養を非常に重視している。猟犬は契丹人狩猟の生活の中で極めて大切であるからである。

2 見守る犬としての番犬

蓋山林はさらにつぎのようにも言っている。「犬は家や家畜を守る。また、いつでもどこででも人間を守る。狩猟のときもそうだ。牧民はいつでも犬と一緒である。」（蓋山林、1989、p.60）

図２　動物群と氈車
出典：梁娜「浅談契丹之犬」p. 95

梁娜の論文「浅談契丹之犬」にも、「喀喇沁旗娄子店１号墓木石西壁面のところで、一台の車轅、高い車輪の氈車があって、車画面の後半部分は家畜群、家畜群の前は馬群。後半に羊の群れがついている。羊の群れの先には犬がいる。

この犬は体ががっしりしている。しっぽを巻いて上昇している。このように、契丹人においては犬が氈車を守って、牧群を看護している」(梁娜、2010、p.96)と指摘している。

六　鎮墓石犬

図３　祖陵
出典：梁娜「浅談契丹之犬」p. 95

契丹人は墓の中に石犬を入れる習慣がある。梁娜は遼祖陵(遼太祖の陵墓)についてつぎのように指摘する。原文は次の通り。「遼代第一個皇帝耶律阿保機及其皇後的陵寢 2003 年試掘時在陵前的緩坡上発現壹尊石人像及一尊石雕臥犬。石人的頭部殘缺，立於石犬旁，應応専門負責管理該犬的人，石犬頭部向西。(中略)古代皇陵陵前所立石像生都是有嚴格的等級制度規定的，並設有専門的官員監督和管理。遼祖陵在陵丘之前陳設陳設石雕像是繼承了唐代皇陵在陵前設立石雕像墓儀的傳統。(中略)由此可見，祖陵石犬包含了多種文化因素，它是契丹在效法唐陵墓儀制度的同時，加入了本民族傳統文化元素和情感，從而創造出具有自身特色的遼陵墓儀制度。陵前立犬的墓儀是由薩滿教的祭祀儀俗逐步演變而來的，犬之所以會受到青睞也是有其深刻的歴史淵源的。契丹民族和北方其他少數民族一様，崇信的是原始宗教――

“薩滿教”。薩滿教是東北地區壹種古老的原始宗教」(梁娜、2010、pp.98-99)。

日本語訳は以下の通り。「遼代初代皇帝及びその皇后の陵寝を、2003 年の試し掘りをした。その時に、陵前の緩やかな傾斜面で、一尊の石人像と一尊の石犬像を発見した。石人の頭部は殘欠しており、石人は石犬のそばに立っており、おそらくこの犬を管理する役目の人物であろう。また石犬の頭が西に向いている。(中略)そもそも古代皇陵陵前立石像はすべて厳格な制度で規定されており、また、専門の役人が監督管理をしている。遼祖陵陵丘の石彫像は唐代の陵前設立石墓儀の伝統を受け継いでいる。(中略)このように祖陵石犬は多様な文化の要素を含んでいる。契丹は隋唐陵墓儀制度を模倣すると同時に、それに自らの元々の民族の伝統文化や感性を加えており、それによって独自の特色を持った遼陵墓儀制度となった。陵前立犬の墓儀はシャーマニズムの祭祀儀俗から徐々に変化して来たと言える。犬がつねに登場するのは、その深い歴史の源から生じているからだ。契丹民族および北方の他の少数民族においては、つよく信じられているのは、いわゆる原始宗教――シャーマニズムである。シャーマニズムは東北地区の古い原始宗教である」。

一方、島田は以下に述べる三種があると指摘する。すなわち「彫刻には、その材質から彫石・籤彫・木彫の三種がある。(中略)上京・中京・慶州の城址から発見された石人・石狗など、および一九四三年私が祖州城址の発掘調査のさいに得た天女・動物文・花文・雲文などを刻した礎石や建築用石材などがある」。(島田正郎、2014、 p.150)また城址から石狗(石犬)が発見されたと言い添えている。

実は、この風習はモンゴル高原ではあり、古くから確認できる。たとえば、『後漢書』の「烏桓鮮卑列伝第八十」の烏桓の箇所で「俗貴兵死、斂屍以棺、至葬、側歌舞送、肥養一犬、以彩繩纓牽、並取死者所乘馬、衣、物皆燒而送之、為屬累犬、使護死者神靈歸赤山」と犬が殉葬に使用された事実が分かる(『後漢

書』、烏桓鮮卑列伝第八十)。烏桓とは、漢、魏、晋時代、内蒙古東部に居住したモンゴルツングース系の騎馬遊民族のことである。烏桓の葬俗では、犠牲とされる犬は死出の山へ道中、死者の霊魂を保護すると考えられている。これもまた死者を案内する犬と思われる。

いままで見てきたように、犬は契丹人の生活と精神にとって重要な役割をはたしている。犬は契丹にとっては、かけがえのない存在と言えよう。また冥界においても、鎮墓石に見られるように犬が魂を道案内しつつ、また警護をしてくれる。契丹人である遼太祖の陵墓で、石犬が石人のすぐ近くにいる事実は、梁娜も指摘していることだが、石犬は石人の警護を示していると解釈できるのではないだろう。

七 遼代壁画

『中国国家地質発形図書-――克什克腾』ではつぎのような記述がある。克什克腾とは古代契丹遊牧民族の集住地である。そこに岩画が豊富に残されている。岩絵の題材は多様であり、内容が豊富で生産と生活にかかわっている。族徽、宗教、祭祀、天体星雲、人面図やトーテム

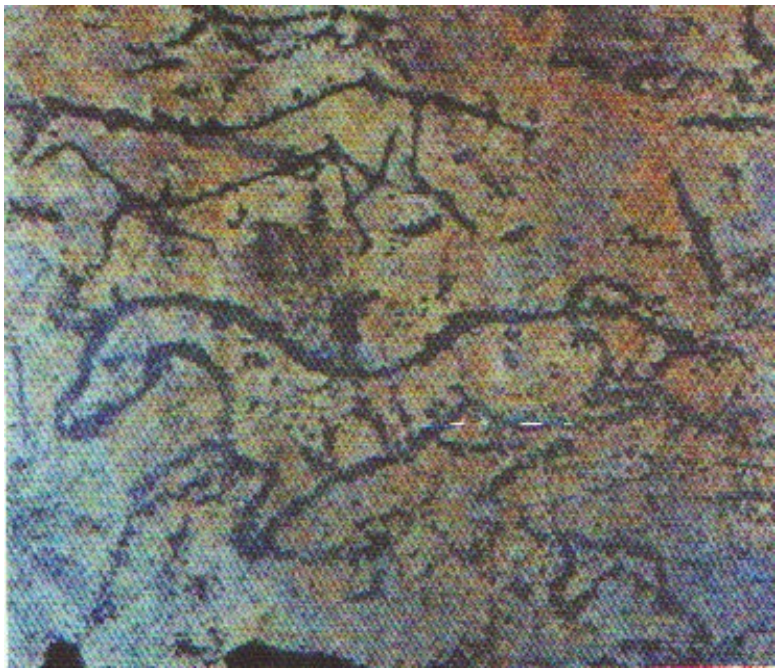

図 4 克什克腾旗二八地一号墓の壁画
出典：『中国国家地質発形図書――克什克腾』p. 45

崇拝などもさまざまな方面に言及されている。岩絵の多くは鹿を中心にして、日月星辰、牛馬野豚犬虎豹などの動物である。

島田正郎は「一般の契丹人の服装については詳しいことはわからないが、たとえば克什克腾旗二八地一号墓の壁画に見られる牧夫などによると、開襟の短衣を身に着け、腰に帯をしめて、長靴を穿つなど、きわめて活動しやすいようにしていたようである」（島田正郎、2014、p.122）と言っている。その壁画(図 5)から見ると、犬も牧夫と一緒にいる。牧夫の普通の生活で、犬がいつもいる雰囲気である。

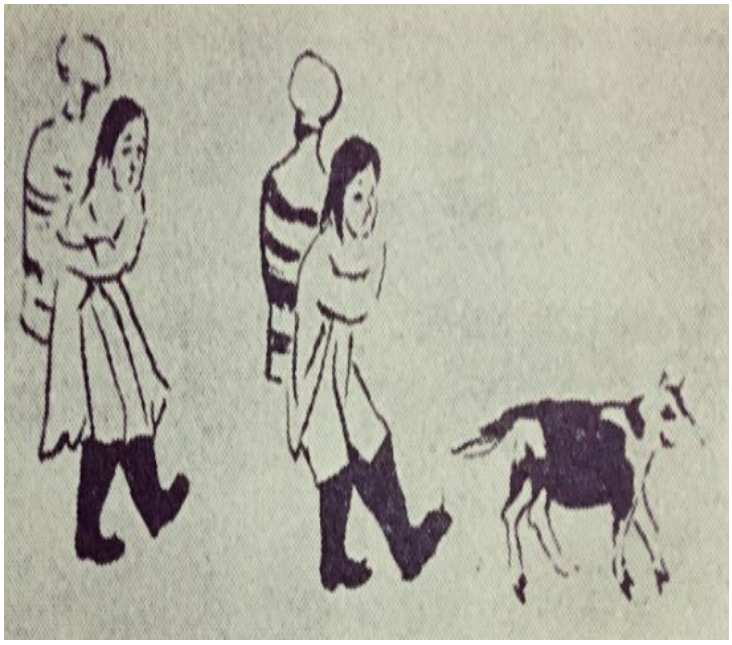

図 5　牧夫と犬
出典：『契丹国・遊牧の民キタイの王朝』p. 123

東の「遼代壁画資料」によると、錦州張杠村 2 号墓(遼寧省錦州市張村杠沈家台公社) は 4 基の墓葬が集中して分布する。それは方形 (2.7x2. 5m)の単室墓で、墓道がある。そして墓室内に石棺画像石が配置されている。東面に犬と狐、西面に牛と駱駝、南面に 3 組の狐と兎、北面に 3 組の馬、羊が彫刻される。石棺の前面に 2 人の門衛と1侍女が表現されている(図6)（東潮、2007、p.146)。

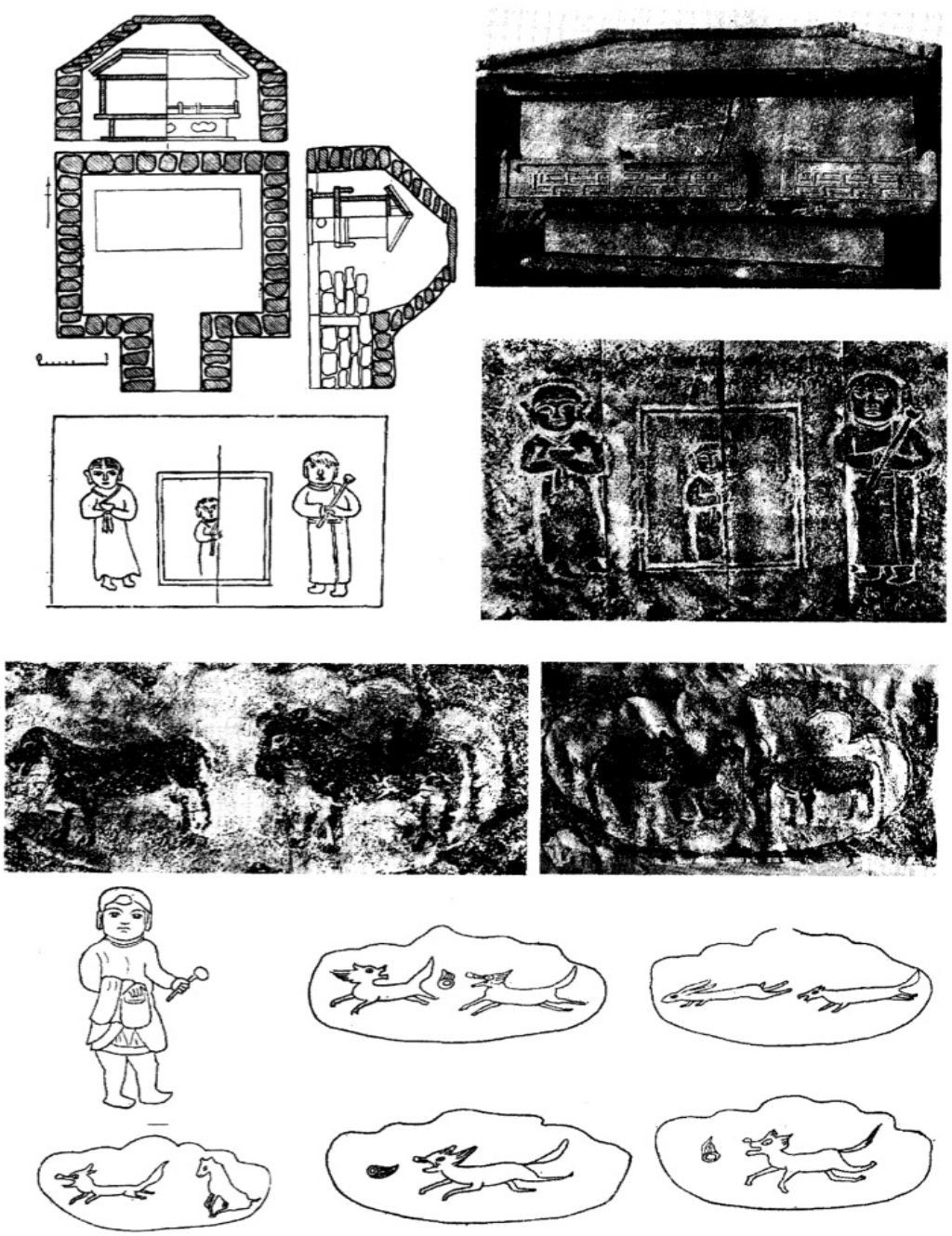

図 6　錦州張杠村 2 号墓
出典：「遼代壁画資料」p. 182

また、庫倫旗 6 号墓(内蒙古自治区通遼市) 全長 22m の両耳室六角形後室八角形の多室墓の壁画は墓道・天井・墓門の漆喰の上に「墨線勾鞠」の技法をもちいて描かれている(図 7)。墓道北壁には、山岳文、牽引馬、両手を胸元であわせる姿の墓主、牽引酪舵、瘤に猿のような動物、さらに犬、鷹匠と男子人物、山岳文が墓道入口に向かって表現されている。それは墓主の出猟図と解釈されている。墓道南壁は墓道入口にむかつて車と 2 頭の駱駝がいる。駱駝牽引車である。対向するように杖のようなものを持つ人物がいる。北壁の人物と対比すると墓主であろう(東潮、2007、p.147)。

図 7 人間と動物
出典：「遼代壁画資料」p. 198

宣化下八里 M 4 韓師訓墓(河北省張家口市宣化区) 仿木構造の塼室墓。墓道・墓門 ・前室・甬道・後室からなる。前室方形、後室六角形。壁画は前室・後室にえがかれる。 前室南壁にあたる墓門の両側に門吏が立つ。西壁に出行図。牽引馬、駱駝車、人物(使臣)馬で構成されている。東壁は 9 人の奏楽図。北壁に門神。天井に星宿がある。後室南壁の両側に門吏、西南壁に 4 男 1 女の飲酒聞曲図、西北壁は装束「準衣装」。北壁に門が表現される。両側に各 1 人の人物像。 東北壁には卓子のまわりに 4 人の婦女がいる。東南壁では欄干のある卓子に 4 人に婦女がいる。足下 に白色花柄の犬が描かれる(図 8)。韓師訓は乾統 10 年 (1110)11 月に卒し、天慶元年 (1111)9 月に火葬後、埋葬されている。墓室構造は近在する張世古墓(1117)に類似する(東潮、2007 年、p.151)。

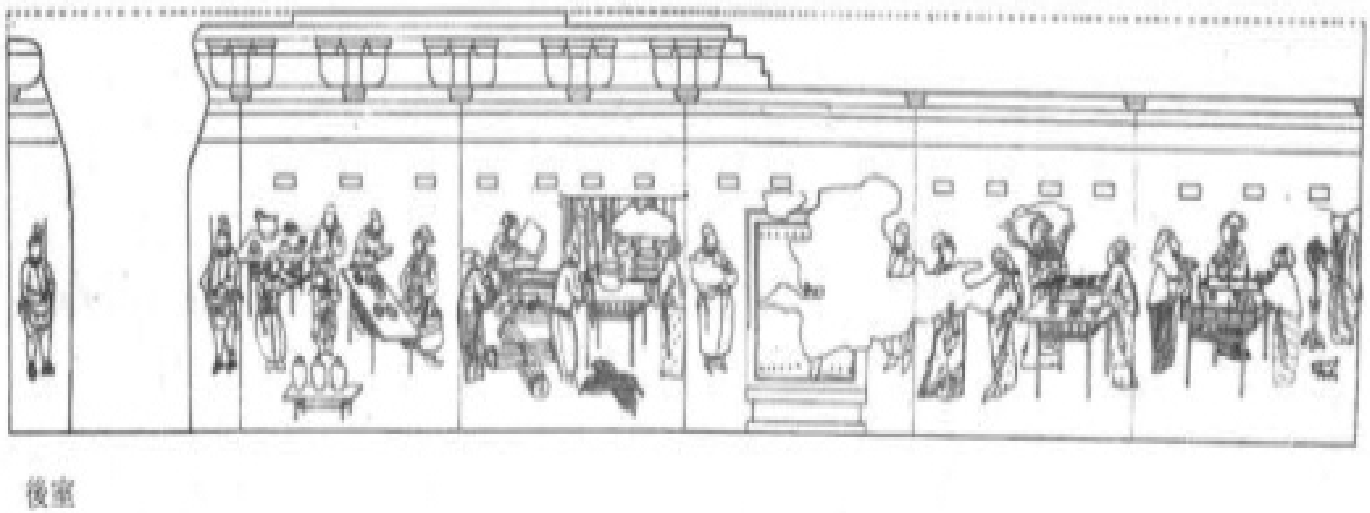

図 8 犬が描かれる
出典：「遼代壁画資料」p. 216

東の「遼代壁画資料」を見ると、契丹人は犬と縁を切れないようだ。墓の壁画では、犬は漢族と同様に契丹人に対しても、冥界の案内者、生活に不可欠な動物として存在する。ところで契丹人の信仰はいわゆるシャーマニズムであると指摘した。シャーマンを介して、人は死んだ後の世界で生き続ける。そして犬は厄よけの霊獣だ。壁画で、いろいろな犬と人間の生活が描かれている。このように、犬はつねに人を守っているのである。

八　結論

上述のように、遼代の契丹族はシャーマニズムという信仰を強くもっていた。漢族と異なり、狩猟が主な生業なので、自然環境および動物との距離が近いことが以下にまとめる特徴を示していると思われる。

もっとも契丹人にとっての犬についての考え方は、中国古代漢族と基盤を同じくしている。すなわち、「辟邪趨吉」（邪を避け、吉を生み出す）という考え方と「人間に忠実」であるという判断がある。また、古代漢族と同じように契丹人も隕石のことを犬になぞらえて、「天狗」と呼んでいた。

大きくは以上のようにまとめられるが、以下で契丹族の犬についての考え方をまとめておこう。

それを大きくふたつにまとめる。ひとつは犬は霊的な意味としてまとめられるものである。

1）　古代中国の漢族とおなじく契丹族も、犬は死者を守護するために必要であるとみなしていた。生前のようにご主人を守ると考えていたのである。

2）　契丹族は伝統的なシャーマニズムと外来の仏教の両方影響を受けていた。その信仰のもとで、犬を含む動物全般を崇拝の対象にしていた。

3）　毎年の八月十五日は契丹族の中秋節だ。その一週間前、八月八日になると、祭祀のために国主は白犬を殺す習俗がある。これは、犬を犠牲にすることによって、犬が霊魂になって鬼神から人間を守れるようにする年中行事である。犬の犠牲は古代漢族でもみられた。

4）　犬は人間に対して重要な役割をはたしている。遼代の皇帝陵の鎮墓石に見られるようにそこに犬がいる。「石犬」が人間のすぐ近くにいる事実は、契丹人と犬との強い関係性を示している。「石犬」は主人を守る能力を持っていると信じられていた。古代漢族でも犠牲にして埋葬した犬は主人を守ると信じられていた。

ふたつめのまとめは実用性（狩猟・遊牧）からまとめられるものである。

1）　契丹族は遊牧民族なので、通常の狩猟の生活においても犬は不可欠である。猟犬と人間との関係は遊牧民族特有な文化をもつ。犬は狩猟のために特有の能力を期待された。

2）　「遼代壁画」も多くの動物の姿を描いていた。そこに犬と人間の日常生活が表現されており、犬が契丹人にとって極めて大切な動物であることが分かる。

3）　これは現代の遊牧においてもそうだが、遼代において、すでに犬は牧群をコントロールする役割をもっていた。

このように犬は霊的な意味と実用性の特徴があるとまとめられるだろう。古代漢民族も遼代の契丹人も、犬は不可欠な生き物であり、同時に霊物でもある。とくに契丹人にとっては、犬にまつわる一年間の祭祀は大切な年中行事でもあった。

参考文献

日本文献(五十音)

東潮、「遼代壁画資料」、徳島大学総合科学部、『人文社会文化研究』、巻 14、2007 年

池鳩洋次、『契丹[遼]と 10-12 世紀の東部ユーラシア』、勉誠出版、2013 年

今井秀周、「遼祭天地について」、『東海女子大学紀要』、25、A1－A9、東海女子大学、2006 年

袁行霈ほか著　原田信訳 『中国の文明6・世界帝国としての文明(下)』、潮出版社、2015 年

島田正郎、『遼史』、明徳出版社、1975 年

島田正郎、『契丹国・遊牧の民キタイの王朝』、東方書店、2014 年

潘小寧、「中国古代における犬と人間との関係－比較文化的視点から－」、『日本生活文化史』、2017 年

村上正二、『遊牧民族国家・元』、講談社、1977 年

山根弓果、「遼諸皇帝の仏教受容と祭天地」、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』、33、龍谷大学大学院文学研究科紀要編集委員会、2011 年

吉田一彦、「契丹(遼)の仏教をたずねて――二〇一二年度の調査から――」、『歴史文化遺産を考えるⅠ』、人間文化研究所年報 (8)、2013 年

中国文献（ピンイン）

蓋山林、「犬岩画・犬・犬祭」、『北方文物』、1989 年第3期

斉建芝、「遼代契丹族萨满教研究」、西北民族大学、修士論文、2017 年

梁娜、「浅談契丹之犬」、『内蒙古文物考古』、2010 年第2期

夏宇旭、「契丹猎犬述略」、『蘭台世界』、2013 年第 36 期

『中国国家地質発形図書――克什克騰』、中華地図、中華地図学社、2007 年

歴史的な史料（時代順）

[漢] 司馬遷、『史記』、中華書局、1982 年第 2 版 （訳注本、吉田賢抗訳注、明治書院、1995 年

[南朝宋] 范曄、『後漢書』、岩波書店、2001年

[宋] 葉隆礼撰、『契丹国志』、国学文庫、1933 年

[元]脱脱等、『遼史』、中華書局、1974 年

第四章　中国「五代・宋元明清時代」における犬と人間との関係

一　関心問題

第二章、「中国古代における犬と人間との関係」、第三章、「中国遼[契丹]における犬と人間との関係（907年から1125年まで）」において、当時の中国人が犬をどのようにイメージしていたのか、文化史的視点からその特徴をあきらかにすることを目的としたものであった。

第二章では、古代漢民族（少数民族も少し含む）は犬が人間とつぎのような特別な関係をもっていることを示した。つまり、古代中国では悪霊（鬼）に対する脅威感が強く、それを防いでくれるものとして、犬に期待するところが大きかったといえる。

それを防げるだけの特殊能力を、人間は犬に期待したわけであり、それは犬というものは予知ができたり、正邪を判断できたりという人間にない能力をもっていると信じたことを根拠にしている。そしてなんといっても現実に犬が人間に忠実であることが、犬に大きく期待したことと関連性があるという事実を示した。

後者の「中国遼[契丹]における犬と人間との関係」の論文では、北方ユーラシアに位置する非漢民族、すなわち、遼朝「契丹」（907年～1125年）遊牧民族をとりあげた。それは、中国においては、五代十国 907 年～960 年から、宋朝960年～1279年、金朝1115年～1234年まで含む時代にあたる。

契丹は遊牧民族なので、遊牧動物の管理のために犬をもっており、それは、

「契丹犬」とよばれる有能な犬である。史料や遺物から見ると、遼朝時代において契丹人は特別な習俗「石犬鎮墓」を行っており、犬は主人と他の動物を守り、他方、妖怪からの魔よけや厄除け、霊物、神霊を浄化するものとしてという宗教的とも言える機能と、猟犬、牧羊犬などの実用的な機能をもっていたと思われる。

遼代の契丹族はシャーマニズムの信仰が強い。漢族と異なり、狩猟が主な生業なので、自然環境および動物との距離が近いこともその理由かも知れない。契丹人にとっての犬についての考え方は、中国古代漢族と基本的には同じであって、「辟邪趨吉」（邪を避け、吉を生み出す）と「人間に忠実」であることがあきらかになった。

契丹族の章においては、犬は狩猟に有用なだけではなくて、人間の生活の中で重要な位置を占めていることも明らかにした。そして、その論文で結論を8つにまとめた。特に、犬は人間に対して重要な役割をはたしている。遼代のお墓の鎮墓石に見られるように、身近に犬がいる。「石犬」が人間のすぐ近くにいる事実は、契丹人と犬との強い関係性を示している。「石犬」はご主人を守る能力を持っていると信じられていた。

本章では中国「五代・宋元明清時代」（五代十国 907年-960 年、宋朝 960年-1279年、元朝1271年-1368年、明朝1368年-1644年、清朝1636年-1912年）の時代を取り上げる。時代、宗教および朝代の違いによって、中国犬文化史の立場から、犬は人間に対して、どのような変容をきたしたのかを明らかにしたい。

史料や先行研究から見ると、以下に詳しく紹介するように、この時期におい

て漢民族の固有の習俗が出てくる。例えば、『宋史』と『元史』には、犬と風神との記録がある。古代から犬は風神と関連性があったが、時代が移行すると変化をきたしている可能性もある。宋朝になると、仏教と道教という宗教の影響力が本土でつよくなってきた。たとえば、仏教は因果応報の思想があるので、犬の禁殺令も出て来た。それらを以下具体的に検討することにしたい。

二　敦煌石窟狗の形象

敦煌莫高窟の第61窟(五代期)について、『中国石窟敦煌莫高窟』(五) の説明によると、「南壁西側の第5区には楞伽経変相部分が描かれ、図はその右下方隅。『楞伽経』は現存3本のうち劉宋の求那跋陀羅訳『楞伽阿跋陀羅宝経』が最も古く、釈迦の楞伽山における教説を内容とする。経が多く抽象的論理を展開し、説話的内容に乏しいものであることから、壁画の制作者は、経に説かれるいくつかの譬喩を選び、それを形象化して経変に仕立てている。(中略)この下方は、同経〈遮食肉品〉と説かれる“諸の悪道に堕すはみな食肉に由りて、更に相殺害す。……一切諸肉悉くまさに食らうべからず”“譬えて旃陀羅猟師、屠兒、魚鳥を捕える人の如く……此来の者、これ大悪人なり”の内容が図示される。すなわち、舞踊の場面の下に幞頭を戴き袍をまとう3人の猟師2組があり、それぞれ1人は右手に鷹を置、1人は犬を牽き、また他の1人は弓、あるいは斧などを持って猟に向かうさまである(下中邦彦、1982、p.218)」とある。

図 1 はこの第 61 窟南壁の壁画で、肉屋の画面である。テーブルの上にいくつかの肉が置かれている。肉屋の主人は刃物をとって肉を切ろうとしている。主人の右に立っている一人の信者が、この肉屋を説得しているようだ。それはおそらく、上掲の説明によれば「殺生をしないでください」、「肉を売らないでください」と言っているのであろう。図の手前の 2 匹の犬がテーブルの上の肉の骨を注視している。(劉艶燕、2012、pp.2-4)

図 1　不要殺生
出典『中国石窟敦煌莫高窟』p. 71
南壁画側　楞枷変部分

さらに、ここに描かれる犬が白い色であるのは興味味深い。本論文の第二章での指摘をふまえると、中国の習俗では、白犬の血を使って、ドアに塗って、不祥を驅逐することができる。これと関係あるのかも知れない。

図 2 は同じく第 61 窟南壁の壁画で三人の猟師を描写している。出発の支度を整え、いまから山の中で獲物を探すことになる。いちばん左の男性は右腕にタカを乗せている。肩には鉄錘(動物を撃ち殺すためのものだろう)を担っている。その右の男は右手で犬を引っ張り、左の肩には斧を担いでいる。一番右の男性は背中に剣の嚢を背負っている。この図の中の動物はあきらかに犬で

ある(劉艶燕、2012)。この犬が猟犬であることは言うまでもない。

敦煌石窟壁画の中で犬のイメージは多様だが、ここでは代表的なものを紹介した。このように中国では犬の文化がずっと続いている。これらの貴重な出土文物と画面は古代において、犬が猟犬として重宝されていたことや、白い犬に魔除けの力が期待されていたらしいことなど、前章までに指摘してきたいくつかの点がここでも確認できる。

図 2　猟師
出典『中国石窟敦煌莫高窟』p. 71
南壁画側　楞枷変部分

三　魔よけ「犬」

『元史』に、「毎歳，十二月下旬，擇日，於西鎮國寺内牆下，灑掃平地，太府監供綵弊，中尚監供細氊鍼線，武備寺供弓箭環刀，束稈草爲人形一，爲狗一，剪雜色綵段為之腸胃，選達官世家之貴重者交射之。非別速、札剌爾、乃蠻、忙古台、列班、塔達、珊竹、雪泥等氏，不得興列。射至糜爛，以羊酒祭之。祭畢，帝后太子嬪妃併射者，各解所服衣，俾蒙古巫覡祝讚之。祝讚畢，逐以興之，名曰脱災。國俗謂之射草狗」(『元史』、巻七七、祭祀志六、1976、

p.1924）という記録がある。この文章について、桂小蘭の論文で、「このように、毎年の十二月下旬の選ばれた日に元の皇帝をはじめとする皇族も出席し、選ばれた少数の高官たちは草人、草狗を壊すまで射続ける。そして羊肉および酒で壊された草狗などを祭る。そして皇帝や皇后、太子および射撃に参加した高官たちは着用していた衣服を脱ぎ、立ち会ったモンゴル人の巫覡（シャンマン）とともにそれに祝詞をあげる。それが終われば、これらの衣服は巫覡の手に渡される。いわゆる脱災（災難から脱する）が行われたのである（桂小蘭、2005、p.263）。」と説明している。すなわち、犬は元代において草で作った犬を射ることによって、魔除けを表したのであろう。王朝が変わっても、「魔除け」という犬の役割は続いている。

明代になると、中国には仏教山は四つある。それらは四大菩薩の聖地である。すなわち、文殊菩薩の五台山、普賢菩薩の峨眉山、観音菩薩の普陀山そして地蔵菩薩の九華山である。地蔵菩薩の乗る霊獣は諦聴という動物である。この諦聴の別名は地獄耳だ。その原身は白い犬である。二階堂氏によれば、新羅僧の金喬覚が連れてきた善聴という白い犬に由来するものと考えるべきあろう。この諦聴という神獣は聴くことで、世界万物を区別できる能力をもつ。とりわけ、人の心を聴くのが得意である。

図1　諦聴
出典；ニ階堂善弘、『アジアの民間信仰と文化考交渉』、p.160

諦聴という動物が始めで登場するのは、有名な『西遊記』である。その中で、孫悟空の本物と偽物の両方が地獄に乗り込んできて、地獄の神々に真偽を見分けろと言ったとき、地蔵菩薩は諦聴のおかげで偽物を判別できた。そして、偽物が暴れると地獄が混乱すると判断して釈迦如来に解決を依頼する。

民間の信仰では、諦聴は「九気」をもっている。その九つとは、「霊気、神気、福気、財気、鋭気、運気、朝気、力気と骨気」のことである。それは魔除け、除災、护符などとして作用する。また、諦聴は神化しで、吉祥の象徴となっている（二階堂善弘、2012、 pp.158-161）。

四　子供と「犬」

清・徐道の『歴代神仙通鑒』巻九一で、「張仙」についての説明では「宋嘉祐中，帝夢一美男子粉面五髯，挾彈而前，曰：“君有天狗守垣，故不得嗣。賴多仁政，予為張而逐之。”又云：“予桂宮張仙也。天狗在天掩日月，下世啖小兒，見予則當避去。”帝頓足而覺，即命圖像懸之（徐道、1995、p.1071）」。日本語訳をすると、「宋の嘉神年間、顔におしろいを塗って、髯を豊かに蓄えた一人の美男子が帝の夢に現れて、彈（はじきゆみ）を持って前に進み出て、言った：陛下には天狗の防害があります。だから、嗣子が生まれない。陛下は仁政を多く行っているので、私、張が、これを追い払ってあげましょう。更にまだ言いました：“私は桂宮の張仙である。天狗は天にあって、日月を覆っている。天から、地上に降りて来て、子供を食べてしまう。しかし、私を見れば、きっと逃げるでし

ょう。”帝は足をバタバタさせて、目を覚まし、すぐに命じて張仙の姿を描かせて、その画を壁に掛けた」。

中国五代十国時代の漢民族の伝説として「張仙射犬」がある。現代ではこの「張仙射犬」は、民間では伝統的な年画の題材として存在している。張仙は子供を守る仙人である。

天狗は煙突を通って民家の室内にもぐりこみ、主に子供をびっくりさせて、天然痘の疾病を伝播する。張仙は、煙突の煙の出口を守るのが役割であり、その天狗が家屋に入らないようにする。この天狗は子どもにとっては怖い存在であり、そのため病気になることがある。ここでは、天狗は妖怪の役割として登場している（陶春蕾、2007、新聞）（川野明正、2000、pp.36-38）。

図 3「张仙射天狗」
出典　:『中国美術全集』
（絵畫編 21 民間年畫）p.126

国家民委网駅によると、少数民族の間には、「埋め天狗」の祭祀がある。女性が妊娠できないのは、天狗の祟りによると信じられている。赤ちゃんの魂にとっては、天狗がもっとも怖い。祟られると女性は将来にも受胎できないのである。それを避けるために「埋め天狗」の祭祀が行われる。子供を欲することを願い、石橋を作って、石橋の隣で、穴を掘り、この穴の坑内にランプをつける。通常、穴は 9 個あるいは 7 個である。穴を掘ったあとで、一匹の子犬を殺して、頭を斬

って、9 個（7 個）のうち、はじめに掘った穴の中にそれを入れる。そして、すべての穴を埋める。この祭祀をすれば、天狗を駆除することができる。その結果、女性も妊娠することができると考えられていた（「仫佬族民間信仰、道教和仏教」、2017）。

日本では子どもにとって犬はどう思われているか

子供の魂に対峙する「怖い犬」と中国人は考える。それをふまえたうえで、比較の意味で日本人にとっての犬は子供にたいしてどのように考えられているのかを以下に簡単に紹介しておきたい。

多くの論考の示していることにしたがうと、日本においては「犬」は子供に対して、中国と逆のイメージがあることが分かる。

昔から日本人は、いつも身近に神様がいると信じている。多数の神様が、人間界に存在しているようである。子供にも、大人にも、苦しいとき、悲しいとき、神様たちは周りで、見えない力を信じて、願って、祈祷して、守ってくれることができる。異なる願いごとごとに、それぞれの神様がいる（畑野栄三、2011、p.3）。

「犬張り子」（いぬはりこ）は日本固有の産物だと思われているけれども、それは日本に平安時代頃に中国から伝来してきた。そして産室に犬筥が飾られていたこともある。

「犬の形をした張り子玩具。平安時代、宮中では、犬の形にかたどっ

た箱を祓の具に用いたが、これが犬張り子の源流といわれる。室町時代には、京都の上流階級の間で、天児、這子などの祓人形とともに、犬の形をした犬筥を産室に飾る風習があった。犬筥の顔は幼児、体は犬に似せてつくってある。犬は出産が軽く、子の成長がよいということによったもので、子供が生まれると産着をまず犬筥に着せ、それから子供に着せて魔除けのまじないとした。また子供の枕元に飾って御守りとしたり、雛道具の一つとして張り子の犬筥を贈ることも行われた。この風習は江戸時代に入って広く一般化され、嫁入り道具に加えられたり、雛祭に飾られたりした。この京都生まれの箱型でなく、犬の立ち姿を模した江戸の犬張り子が、江戸中期以降出現した。代表的な江戸玩具に数えられ、上方では東犬とよぶ。民間では、男の子は誕生後三一日目、女の子は三三日目に産土神に宮参りをするとき、この犬張り子にでんでん太鼓を生麻で結び付け、祝い物として母の実家や親類縁者から贈られた。この風習は大正年間までみられた(『日本大百科全書』(2)、1985、p.527)」。

それは日本全土に分布して、京の貴族においては、郷土玩具などに用いられている。

日本の張り子の技術は二世紀に中国に始まり、アジアやヨーロッパにも伝わったと言われる。しかし、私の理解では、現在の中国で、特に日常生活で、「犬張り子」についての信仰は伝えられていない。なぜかと言うと、中国は古代から現代まで時代の変遷があり、また王朝の変化にともない民族が混交したため、「犬張り子」に関する伝統が消えてしまったのではないかと想定している。それ

に対して日本は、時代の変遷を経ても、民族混交がないため、後世まで継続したのではないか。

図 5 「犬張り子」
出典 :『日本のお守り』 p.122

畑野栄三『日本のお守り』によると、「犬張り子」のうち「浜松張り子は静岡の代表的な郷土玩具で、この犬張り子も明治時代から全国に知られていた。(中略)犬の出産が軽いことから、安産と子どもの成長を願う玩具として江戸で発展し、初宮参の祝いとして贈ったり、子どもの枕元に置いて、魔除け・成長のお守りとする習慣が生まれた」(畑野三栄、2011、p.122)。

また、「笊かぶり犬」は東京の縁起物の代表として、子供の魔除けや育児保護という御利益があると信じられている。親戚に子供が生まれると、初宮参りのお祝いとして犬張り子を贈り物とする習慣があった。「わざわざ竹で編んだ笊をかぶせているのは竹の下では犬が笑という字になるという江戸っ子の洒落で、笑いをたやさず子どもが無事に成長するようにという願いが込められて

図 6 「笊かぶり犬」
出典 :『日本のお守り』p.68

いる。また笊が風を通すことから、子どもの寝ている天井に吊るすと鼻づまりを防ぎ、風邪をひかないとか、病気を起こす虫を笊ですくい取るなどのおまじないの意味もあったという」（畑野三栄、2011、p.68）。

犬は中国で、子どもと出産の視点から見ると、妖怪の役割として、マイナス面があり、子どもの魂にたいして怖い存在としてあり、子どもは病気になったり、体が弱くになったりする。女性にたいしては、不妊の原因になる。

それに対して、日本で犬の役割は、上述のように、プラス面があり、「犬」は子どもの健康や成長などを守ってくれる。子どもを見守るお守り犬と女性の安産も守ってくれる。両国の間に大きな相違点があることを指摘できよう。

五　龍のデザインと「犬」

皇帝のお墓などには龍デザインがある。たとえば、羅哲文の『中国歴代の皇帝陵』の山海関外の四によると、「陵は、前院、方城、宝城の三つの部分からなり、周囲を赤い壁で取り巻いて入いる。南面の前院の真中に正紅門があり、院の中に四つ碑亭が並んでいる。碑亭の中心には、四人の先祖をたたえる大きな石碑が立っている。碑亭の東西両側には、はじめ祝版亭、斉班房（詰所）、茶膳房（茶沸かし場）、滌器房（器物の洗場）などの建物があった。碑亭の北は、前朝後寝（前に朝廷、後ろに住居）という宮廷の制度に従って、前に方城の中に享殿が設けられ、左右の壁に五彩のルリの蟠龍（地上にわだかまっている龍）が象嵌してある。それが赤壁、黄色瓦に色彩をそえている。方城の正殿は啓運

殿で、中に暖閣（大机をそなえた部屋）、宝床があって神様の位牌が祭ってある。その東西に脇殿がある。殿の前に焚帛炉が一つ設けてある」（羅哲文、1989、p.243）。ここには、お墓の中には、壁で龍のデザインがある。

龍は漢民族が代々崇拝している大切な神物だ。龍は漢民族のシンボルとか象徴とも言える。すなわち民族の精神を象徴している。それは自然界に存在する生物ではないが、必ずしも架空（フィクション）とは思われていない神物である。古人が描く龍は、最初は蛇を主体としたデザインであった。それが他の動物の形態とも融合して、徐々に変化してしまったのだ。龍のデザインの変化の過程で、黄龍と青龍が主となった（劉毓庆・趙瑞锁、2009、pp.200-207）。

龍は明清両代の帝王の建物の中につねに現れた。龍は鹿角、牛頭、虎眼、馬口、犬耳、鷹爪、蛇身、魚鱗などの動物の形象を組あみわせている（魏娟、2013年）（李祥紅・王孟義、2010年）。龍の紋様は、吉祥や幸福の象徴である。そのため、多数の犬形態の龍のデザインが登場する。

『瑶族盘瓠龍犬図腾文化探究』によると、古代から工芸品、画像石などに古く時代から龍のデザインと犬は見つけたと言われた（李祥紅・王孟義、2010、pp.177-184）。

1 宋元時代の犬形の竜(龍)紋様

皇帝は、天から地上に降りて来た「真龍天子」である。たとえば、蕭軍の『八月の郷村』で、「真龍天子一出世，天下也許就太平了(『漢語大詞典(第二巻)』、1994、p.152)と詠まれている。翻訳すると、「真龍天子がひとたび出に現れると、天下は太平になる」と見なされていた。龍紋様は皇室専用だった。そのため、龍の形が最も豪華であるというイメージがある。

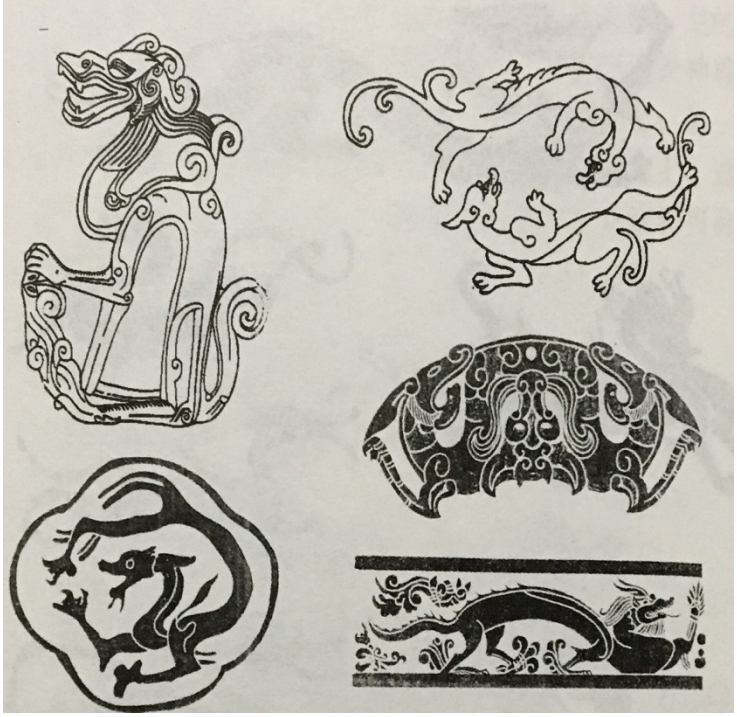

図 7　宋元時代の犬形の竜（龍）紋様出典　:『瑶族盘瓠龙犬图腾文化探究』p・184

宋元時代に現れた犬形龍は非常に精巧で貴重な美しいものと見なされた(李祥紅・王孟義、2010、p.183)。犬形の龍は、権力者たちの権力を守り、健康と吉祥を象徴していると信じられたのである。

2　明清時代における犬形の龍の紋様

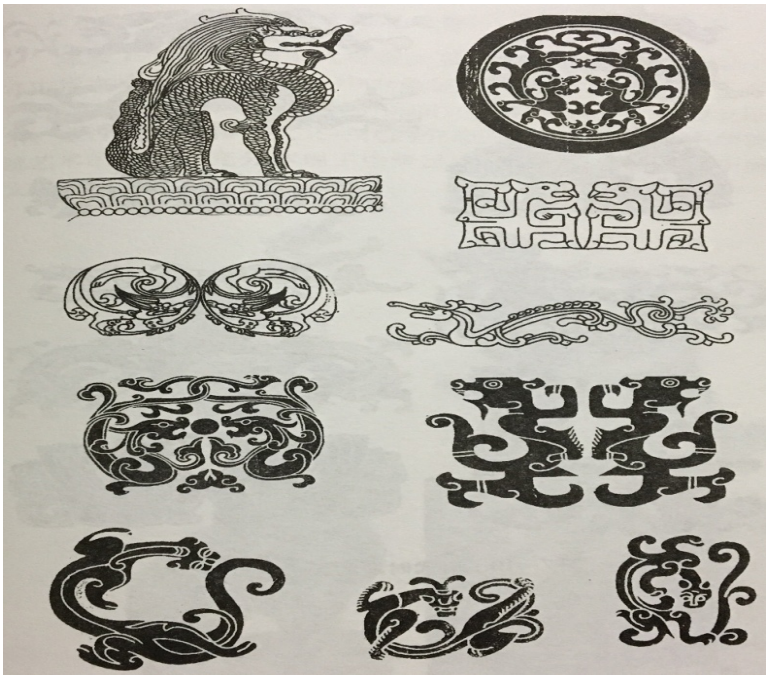

図 8　明清時代の犬形の竜（龍）紋様
出典　:『瑶族盘瓠龙犬图腾文化探究』p・184

明清は龍デザインの文化が最も活発な時期である。ただ、この時期は宮廷文化と民間文化との風格が違う。宮廷の龍はまだ威厳を強調して神格のイメージだ。民間では、他の動物形態をもった龍は、家庭の安らぎと祥瑞の雰囲気をもっていた。この時代になって、龍文化芸術は普通の庶民の生活の中に組み入れられてきた。そして、多くの生き生きとしたかわいい犬形の龍紋様が誕生したのである。（李祥紅・王孟義、2010、p.185）。

宋元時代から明清時代へと時代が変わるにつれ、犬形の龍紋様は、皇室から影響を受けつつも、庶民の間で独自の発展をとげ、楽しく、幸せな、豊かな生活をすごすことを象徴するようになった。さらに犬形の龍紋様は、明るく、可愛い形にさえなっていった。庶民の生活が豊かになった結果、人間の生活のなかに多くの犬の姿が見られるようになり、犬形の龍信仰も盛んになった。そしてさらに、清朝が滅びた後、皇帝がいなくなったことにより、皇帝専用だった龍は完全に民間のものになったのである。

六　犬食文化

中国には、「民以食為天」ということばがある。「庶民は食を以て天と為す」という意味だ。時代の変遷によって、それぞれの地方では独自の飲食方式や飲食習慣を形成した。桂小蘭は次のように言う。「先秦、両漢時代に犬肉は格付が高く、人気のある食肉であった。そのため犬肉のみを扱った専門業者、（狗屠）まであらわれた。特に漢代には豚肉より人気があり、中産階級のような裕福層の人が食べる肉であったが、唐、宋、元の頃は羊肉に人気があり、富裕な人はたいてい羊肉を好んでいた。犬肉は当時等級が落ちていて、下層階級あるいは犬肉嗜好をもつ一部の人の食べる肉になってしまった。」（桂小蘭、2005、p.317）。つまりは犬肉は安くてよくある食材となった。しかし時代によって、宗教やその他の事情により犬に対しての「禁殺令」が出た。

A. 宋代犬禁殺令について

宋代では、犬肉を食べることが禁止されていた。

> 崇寧初，范致虚上言：十二宮神，狗居戌位，為陛下本命。陛下本命。今京師有以屠狗為業者，宜行禁止。因降指揮禁天下殺狗，賞錢至二萬（『曲洧旧闻』、巻七、崇寧初禁天下殺狗、1959、p.178）。

訳すと、崇寧年間の始め頃、范致虚は当時の皇帝に上奏をした。一年に十

二支があり、そのときの皇帝の本命の年が戌（犬）だったので、犬を殺すことを禁じたという。狗屠殺業（犬を殺す職業）が廃業になり、民間では犬肉が食せなくなった。皇帝による 「禁殺犬令」は、その後、法律になった。この皇帝が戌年であるというのも、ひとつの原因であったが、じつはそれ以外にもうひとつの理由があった。当時は仏教が流行していた。仏教は不殺信念がある。そのため犬を殺さないという考えが示されたのである。

B 清代の犬禁殺令について

清代は満洲族が政権をとっていた。伝説によると、開国の父、ヌルハチ（努尔哈赤）は犬に命を助けられたことがあり、これ以降、満洲族では犬が開国の祖の命の恩人とみなされた。満州族では犬肉を食べられないことになったとされる（荣恒山、1998、p.78）。漢民族では、宗教の影響を受けて、「清代においては牛とともに犬も殺生禁断の対象に含まれていたのである」（桂小蘭、2005、p.334）。清代はチベット仏教の影響が特に強くて、それも犬を殺すことを禁じる傾向にあるの要因と考えられる。

ちなみに、加茂の『家畜文化史』の指摘によると、清滅亡後の 1928 年、北京でも犬肉を食べることが禁止された記録がある（加茂儀一、1973）。

C 日本の犬禁殺令について

日本にはもともと「犬食」文化はほとんどないが、日本にも似たような犬殺を

禁止する令（生類憐みの令）があった。日本で、「生類憐みの令」を出された理由はとしては、一つは、江戸幕府五代将軍徳川綱吉は戌年生まれであった。この禁止令が「1682（天和 2）に戌の虐殺者を死刑に処したことから始まり、1685 年（貞享 2）馬の愛護令を発して以来、法令が頻発された」（『日本大百科全書』（12）、1986、p.183）。二つ目、嗣子の恵まれないため、側近の進言を受けた。こうして、1709 年に廃止されるまでの間、犬禁殺令が実施されていた。

根崎光男の論文によると、日本人には伝統な動物保護思想がある。日本では、古くから寺社での殺生が禁止されていた。そのため、境内や池には、「生類」が放たれたところがある。日本では、近世前後から全国各地で犬殺しや犬飼いが禁止された（根崎光男、2005、pp.9-16）。

七　猟犬から愛玩犬への変容

満族においては、清朝を建てるより前の時代、猟犬は彼らの生産と生活に対して重要な役割を果たしていた。猟犬は狩猟のために不可欠であり、狩猟をする満族の良い助手となる。そもそも犬は忠実な性格を持っているために信頼された。時代が変わり、清朝になると、宮廷での愛玩犬が誕生し、それが風俗ともなった。

梁志欽や李理の論文によると、訓練された猟犬は清朝の馬術と弓術のイベントのときに主要なパートナーとなって活躍した。また、清朝末期に至ると、宮廷において、犬を飼う風俗が一層深く浸透し、その上流社会においては、愛玩

犬がひろくいきわたった。すなわち清朝の後期になってくると、馬術と弓術の名犬が徐々に宮廷貴族の王子と姫達のペットと化したのである。つまり犬は猟の訓練から宮廷の王子と姫達の愛玩としての役割に変わったのである。（梁志欽、2018）（李理、2015）。

また、李理の論文では、清朝末期の王宮貴族においては贅沢三昧な遊ぶ風俗が盛んとなった。宮廷の大臣たちは一日中、犬と遊んだり、鳥かごを提げて静かな所で遊んたりした。大臣たちはあまり政務に熱心ではないというような状況が生まれて、その結果、国は次第に崩壊する方向に向って行くことになるのである。

八　結論

上述のことがらをまとめると以下のようになろう。

1）　敦煌石窟壁画の中で犬のイメージは多様だが、代表的な南壁画側　楞伽変部分を紹介した。このように中国では犬の文化がずっと続いている。これらの貴重な出土文物と画面がその時代において、犬が猟犬やとして重宝されていたことや、白い犬に魔除けの力が期待されていたらしいことなど、前章までに指摘してきたいくつかの点がここでも確認できる。

2）　犬は元代において草で作った犬を射ることによって、魔除けを表したのであろう。王朝が変わっても、「魔除け」という犬の役割は続いている。

3)　子供の魂に対峙する「怖い犬」という中国人の考え方がある。日本では、犬は中国と逆のイメージがある。日本で犬の役割は、プラス面が強く、「犬」は子どもの健康や成長などを守ってくれる。子どもを見守るお守り犬と女性の安産も保障してくれる。両国の間に大きな相違点があることを指摘できよう。

4)　恐ろしい犬という感情の応用と思えるが、天狗（犬）が煙突などを通じて、天然痘などのおそろしい病気を伝播する、あるいは天狗の祟りで妊娠できないという信仰が存在した。

5)　龍デザインの流行と犬の関係。宋元明清時代の犬形の竜（龍）紋様が登場する。とりわけ庶民の間では、犬は明るく、可愛い形にさえなっていった。その時代、政治が安定し、庶民の生活が豊かになる。その結果、人間の生活のなかに多くの犬の姿が見られるようになり、犬図腾信仰も盛んになった。

6)　時代によって、宗教やその他の事情により犬に対しての「禁殺令」が出た。宋代と清代との間では、かなり共通して犬を殺すことを禁じる傾向にある。また、日本においても同様の現象がみられた。

参考文献

日本文献（五十音）

相賀徹夫、『日本大百科全書』(2)、小学館、1985 年

相賀徹夫、『日本大百科全書』(12)、小学館、1986 年

五十嵐健二、『張子－伝統から創作へ』、日貿出版社、2006 年

加茂儀一、『家畜文化史』、法政大学出版局 、1973 年

川野明正、「天翔る犬」、『饕餮』、第8号、2000 年

桂小蘭、『古代中国の犬文化』、大阪大学出版社、2005 年

下中邦彦、『中国石窟敦煌莫高窟第5巻』、平凡社、1982 年

根崎光男、「生類憐み施策の成立に関する一考察――近世日本の動物保護思想との関連で―」、『人間環境論集』、第5巻、2005 年

畑野栄三、『日本のお守り』、池田書店、2011 年

羅哲文、『中国歴代の皇帝陵』、徳間書店、1989 年

中国文献（ピンイン）

李祥紅・王孟義、『瑶族盘瓠龍犬圖騰文化探究』、民族出版社、2010 年

李理、「“十骏犬”清代宫廷的另类“宠物” 」、『紫禁城』、故宫博物院、2015 年

劉毓庆・趙瑞鎖、『龍的文化解讀』、人民出版社、2009 年

羅广平、『龍圖騰』、寧夏人民出版社、2006 年

荣恒山、「略談满族民俗」、『满族研究』、1998 年第1期

陶春蕾、「張仙射犬伝説」、中国集邮報、2007 年

王樹村主編、『中国美術全集』(絵書編 21 民間年書)、人民出版社、1985 年
魏娟、「原始龍紋的演變及在現代首飾中的應用」、中国地質大学、2013 年
袁珂、『中国神話伝説辞典』、北京联合出版社、2014 年

URL

梁志欽、「清代宮廷王公貴族盛行養犬中期描繪王公貝勒射獵繪畫有所增多」、『新快報』、(2017 年 12 月 10 日)
http://news.163.com/18/0107/00/D7GP6RV900018AOP.html
劉艳燕、「狗年話狗」、敦煌研究院、敦煌石窟旅遊網、(2018 年 11 月 1 日)
http://public.dha.ac.cn/content.aspxid=720958752222
「仫佬族民間信仰、道教和仏教」、中華人民共和国中央人民政府网、(2017 年 12 月 15 日)
http://www.gxlc.gov.cn/zjlc/lylc/msfq/5122317.html

歴史的史料

[南宋]『曲洧旧闻』、朱弁撰、中華書局、1959 年
[明]『元史』、宋濂・等撰、中華書局、1976 年
[清]『歴代神仙通鑒』、徐道、遼寧古籍出版社、1995 年